慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生命・ 環境・ 宗教 : 将来への展望
Sub Title	Aiming toward the future
Author	間瀬, 啓允(Mase, Hiromasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1999
Jtitle	哲學 No.104 (1999. 12) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	Religion is not ethics, but the fruits of religion are ethical. Therefore, religion must recognize that environmental ethics, ethics of life and of religion are urgent issues and it must respond to them without fail. To recognize and deal with these issues, religion must reconstruct and change itself in order to aim toward the future. There will be a crisis in religion if it does not revolutionize and creatively concern itself with the fruits it will bear in the future. In concrete terms, the earth's vegetation is being destroyed, tidal flats have been extinguished, and the sea, the sky, and the earth have been polluted by toxic substances. Civilization is dying now. In this critical situation people do not want to read or hear about faith or follow religions. However, even in the situation in which they cannot believe in love or compassion, they are still able to come to understand the actual world and recover their faith and belief, if and only if they see, feel and comprehend what is actually happening around them. As parents, for example, if our children talk with us about dead fish floating on the river, we know that strontium 90 has soaked into their bones, and we understand what the destruction of nature means. All parens share this feeling of pain and suffering. This is truly what religion teaches; that is, compassion. People expand the circle of compassion when they suffer together with the earth. An individual begins to reflect on himself and ask himself who he is for the first time only when he becomes one who experiences love and compassion as well as pain and suffering. He might discover that in sharing his pain and suffering with others he is not the only one who is saved and healed. When an individual realizes that life is interwoven with relationships with others, his actions become guided by the heart of supporting others. We must see our true and essential selves from this point of view. We are parts of an interconnected life-system. Therefore, whether or not we are able to affirm ourselves as parts of the whole may be the ultimate key for life today.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000104-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

生命・環境・宗教

——将来への展望——**

間　瀬　啓　允*

Aiming Toward the Future

Hiromasa Mase

Religion is not ethics, but the fruits of religion are ethical. Therefore, religion must recognize that environmental ethics, ethics of life and of religion are urgent issues and it must respond to them without fail. To recognize and deal with these issues, religion must reconstruct and change itself in order to aim toward the future. There will be a crisis in religion if it does not revolutionize and creatively concern itself with the fruits it will bear in the future.

In concrete terms, the earth's vegetation is being destroyed, tidal flats have been extinguished, and the sea, the sky, and the earth have been polluted by toxic substances. Civilization is dying now. In this critical situation people do not want to read or hear about faith or follow religions. However, even in the situation in which they cannot believe in love or compassion, they are still able to come to understand the actual world and recover their faith and belief, if and only if they see, feel and comprehend what is actually happening around them.

As parents, for example, if our children talk with us about dead fish floating on the river, we know that strontium 90 has soaked into their bones, and we understand what the destruction of nature means. All parens share this feeling of pain and suffering. This is truly what religion teaches; that is, compassion.

People expand the circle of compassion when they suffer together with the earth. An individual begins to reflect on himself and ask himself who he is for the first time only when he becomes one who experiences love and compassion as well as

* 慶應義塾大学文学部教授（哲学）

pain and suffering. He might discover that in sharing his pain and suffering with others he is not the only one who is saved and healed. When an individual realizes that life is interwoven with relationships with others, his actions become guided by the heart of supporting others.

We must see our true and essential selves from this point of view. We are parts of an interconnected life-system. Therefore, whether or not we are able to affirm ourselves as parts of the whole may be the ultimate key for life today.

はじめに

「レリジョン　イン　ザ　メーキング」(Religion in the Making) はホワトヘッド (A. N. Whitehead) の著書の題名であるが，これは宗教が生きた運動体として常に「形成の途上にある」(in the making) ということを意味している．宗教は生きた運動体として常に前進して将来に向かうというのだ．将来に向かう道すがら，宗教はさまざまな問題状況に直面しつつ，さまざまに自己を形成していくというのだ．したがって，もしも宗教が将来に無関心でいるならば，また問題状況にも無関心でいるならば，それは，宗教が＜危機の宗教＞の状態にある，ということにはならないか．

将来に向けて自己を形成していく途上で，宗教はいま問題状況がどういうものであると認識しているのだろうか．また，その問題状況にどう対応しようとしているのだろうか．もしもその認識に欠け，また，その対応にも欠けているならば．それは，宗教が＜危機の宗教＞の状態にある，ということにはならないか．

言うまでもなく，宗教は倫理ではない．しかし，宗教の結ぶ＜実＞は倫理的である．そこで，宗教はいま環境の倫理，生命の倫理，宗教の倫理を切迫した問題状況であると認識し，これに誠実に対応していくべきではないのか．宗教はそういう認識と対応をもって自己を形成し，あるいは変革し，あるいは将来に向けて自己を開放していくべきではないのか．もしも将来に向けて自己変革的でもなければ自己開放的でもなく，また，将来に

結ぶ＜実＞についても無関心であるならば，それは，宗教が＜危機の宗教＞の状態にある，ということにはならないか．

いま少し具体的に述べよう

身のまわりでグリーンが破壊され，干潟が消滅し，有害物質によって海も空も大地も汚染されている．いま文化は死に瀕している．こういう状況のなかで，宗教だの，信仰だのといっても，うさん臭く感じられるばかりだ．ところが，こういう状況になると，原理主義的な信仰はヒステリックになって，独善と分裂を生みだす．だから，宗教や信仰にアレルギーを起こすのは当然ではないのか．けれども，神仏の慈悲や慈愛が信じられないでいるこの現実世界のなかで，現実に起きていることがらを純粋に見つめ，感じ，理解することによって，そこに起きていることがらの本質を知り，信仰や信念を回復することはできないだろうか．

子供が川で死んだ魚の浮いていたことを話せば，親は子供たちの骨にストロンチューム九十が含まれていることを感じて，痛みをおぼえるだろう．自然の破壊が死を意味することを知って，痛みの心を共有するからだ．これは「コンパッション」，宗教でいう「慈悲／慈愛」のことなのだ．大地とともに苦しむことによって，慈悲／慈愛の輪を大きくひろげていく．慈悲／慈愛の体験者となって，はじめて自分が何者なのかという反省をはじめる．そして，痛み苦しみのなかで，痛み苦しみの共有者として，自分ひとりだけが癒され，救済されることはないと知る．なぜなら，他とのつながり，他とのささえあいのなかで，生命はネットワークを作っていると知るからである．ここに現実的な，私たちの本質的な部分がある．私たちは生命システムのなかの一部分なのだ．だから，生命としてのこの本質を肯定できるかどうかが，いま私たちの重大な試金石となっているのだ．

宗教が「我の放下（ほうげ）」とか，「自我（エゴ）から自己（セルフ）

への解脱／解放」と言うとき，実はこのことに関係しているのではないのか．人間が人間中心的な自己愛の正体を見抜いたとき，「ああ，悪かった」と悔いて，意識に根本的な変革を起こす．それは人間以外の他の生命への関わり方や，それに対する責任感の持ち方の変化となって現れる．いま，この変化のことが「スピリチュアルなもの」，「霊性的なもの」と言われているのだ．だから，「霊性，スピリチュアリティ，の自己発見の旅」というものが，いま大事にされているのだ．大きな全体のために働く力を得たという自分を意識するならば，そうした力じたい，実はその働きを向けたものから授かった力なのだ．宗教では，これを「恩寵／恵み」と表現してきたのである．

大きないのちに生かされて，私のいのちは生きている．私は生かされて生きているのだ．ああ，ありがたい．＜いのち＞について，このように自覚させるものは，いうまでもなく，宗教である．宗教は，本当の自分，真の自己との出会いを助ける．いま生きているこの自分は，本当の自分ではない．「本当の自分」は，この「自分ではないもの」によって成り立っている自分，「我ならぬもの」によって成り立っている我なのだ，と宗教は教える．ここに，実は，宗教の教える＜救い＞の真意がこめられているのである．

これはきわめて今日的な宗教観ではないか．本来の自己（セルフ）を知ることが，「救い／癒し」に結びついているのである．このような人間的生の現実的な変革は，事実として，どのような宗教にも生じている．その限りにおいて，宗教はどれも「道」であり，「途上」にあるものなのだ．＜道の途上にある＞という自己認識によって，宗教はどれも脱制度的，脱教義的に，将来に向けて逞しく自己を創造していくことができるのだ．もしもそうでないならば，それは，宗教が＜危機の宗教＞の状態にある，ということにはならないか．

さらに具体的に述べよう

宗教というのは，本来，自然のなかにあって，自然の大生命と一体となる経験から展開してきているように思われる．「生きているいのち」が「生かされているいのち」と一体であるという自覚は，人間の心の奥底にある霊性，スピリチュアリティと，自然のふところの奥底にある霊性，スピリチュアリティとの，不思議な和合を物語っているのではないのか．

仏教では山川草木に悉く仏性（ぶっしょう）が有る（「山川草木悉有仏性」）といい，神道では「神心（かみごころ）」といって，一滴の露，野の鳥，曙の空にもこれが宿っていると見ている．キリスト教では自然は「第二の聖書」であり，神の「生けるからだ」である．それは「見えざる＜恩寵＞の見ゆる形」として，「サクラメント」なのである．したがって，自然はときに教会に代わる魂の浄化力であり，神意を伝える奥義でもあるのだ．

「霊性，スピリチュアリティ」は「霊，スピリット」から出来たことばである．それは「息づくもの」を意味することばであるから，人間，動物，植物のような生きもの全部をさす．しかし，大地も生きている．地球も宇宙も＜いのちの源＞であり，いのちに必要な要素をすべて備えて，創造を持続させている．したがって，「霊性，スピリチュアリティ」は生命中心の態度のことなのだ．生命を脅かし，死に至らしめることに対抗する態度のことなのだ．「霊性の豊かな人」とは，リアリティの持つそうした側面を理解することのできる人，神仏という究極リアリティにかかわってその深みに達することのできる人のことをいうのである．だから，いま，洋の東西を問わず，＜夫婦で歩くお遍路さん＞が着実にふえていて，「霊性の自己発見の旅」といわれるものがはじまっているのである．

私は旅先で，スピリチュアリティをもとめる熟年のアメリカ人牧師夫妻と出会ったことがある．ふたりは数週間のイギリス巡礼の旅，霊性の自己

発見の旅，の途上にあった．

「現在の豊かな物質文明のなかで，私たちの生活は忙しすぎます．個人の生活でも，社会の生活でも，いつでも忙殺されています．自分を顧みるひまがありません．そうして，自分自身を見失ってしまっているのです．そのことに気がついたからでしょうか，いま，無性に＜飢え＞を感じるのです」と言って，ふたりは近隣にある古い修道院や礼拝堂を巡礼していた．

いま，アメリカでは，ひとびとは経済的な関心だけに基づいた生活を空虚なものと感じ始めているようだ．この虚しさを埋めるために，宗教的なもの，霊性的なもの，スピリチュアルなものが求められているようだ．ここには認識の枠組みの転換，パラダイム・シフトが要求されているようである．つまりは，自然観，人生観，生命観の見直しが求められ，そこに宗教が関わっているようなのである．

そういえば，あのとき，正確には1995年の夏，あの熟年の牧師夫妻は「いのちは大いなる賜物だ．抱かれているのだ．逃げ出してはならない」とつぶやくように言い，「いのちのルーツは神との＜密接な＞関係にある」とも語っていた．「その神はどんな神か」とたずねた私に，「超越的であるが，内在的でもあるような神だろうか……」と，幾分か，ためらう様子で私に応じていた．

よくよく考えて見れば，「衆生（しゅじょう），生きとし生けるもの」は，みなサクラメンタルなものである．被造物はみな神の内在のシンボルなのだ．この内在は霊性，スピリチュアリティにおいて自明なのではないのか．私たちが「生き，動き，かつ存在している」のは，ほかならぬ「神のうちに」おいてである．この証言によって，この神が「超越にして内在なる神」，「超越即内在」の神だ，ということを知ることができる．神についてのこの理解のしかたは，＜汎–在–神論＞pan-en-theism といわれる．「内在」を関心事とする＜汎神論＞pantheism と「超越」を関心事とする

＜一神論＞monotheismとの，ふたつの異なる関心事の統合がここには見られる．伝統的なふたつの神論を統合した，この新たな現代の神論，＜汎-在-神論＞のもとで，実は宗教がエコロジーに結びつくのである．

霊性の自己発見の旅をすませた牧師夫妻は，その後，私にこう知らせてきた．

「私たちにとって，いま霊性とは＜沈黙＞＝聞くことであり，＜従順＞＝神に従うことであり，＜祈り＞＝許しを受けることであり，＜コミュニティ＞＝和解することです．つまり自然に対して，自分に対して，コミュニティに対して，密接な関係を回復することにより，いま癒しを感じています．ですから，この場合の＜密接な＞という意味は，＜密接＞＝＜霊性的＞＝＜自然的＞というイコールの関係にあるように思われます」．

この手紙を読みながら，私ははじめて夫妻と交した会話のことを懐かしく思い起こしていた．あのとき，「いのちのルーツは神との＜密接な＞関係にある」といわれて，私は「その神はどんな神か」とききかえした．今でなら，夫妻はためらうこともなく，神は「超越にして内在」「私たちは神のうちに生き，動き，かつ存在している」と答えるだろう．霊性に深くめざめたひとの発露がここにある．

今日のエコロジカルな関心は，こうした霊性と結びついて，グリーンな変革を引き起こす．21世紀は，エコロジーとともに，宗教と霊性がきわめて重要視される時代になるのではないだろうか．

前向きに，将来の社会を構想するこれからの時代は，量の時代ではなく質の時代――，つまり物質的な財だけに価値が集中する時代は終わり，非物質的な生活に高い価値が要求されるような，そういう時代に変わっていくのではないだろうか．高度経済成長が人心と自然の荒廃を招いたことは，だれの目にも明らかである．そこで私たちは，いま姿勢を正して，この流れを変えていく必要があるのではないだろうか．私たちの経済生活のなかに高貴な精神性，豊かな霊性といったものが求められるような，そう

いう＜質＞重視の生活を築きあげていくことが急務なのではないだろうか.

スモール　イズ　ビューティフル

ドイツのボンで生まれ，35歳の年にイギリスに帰化した現代の経済学者，エルンスト・シューマッハーは，『スモール　イズ　ビューティフル』という本を書き，そのなかで，現代における極端な物質中心の経済を批判し，これに代わりうるものとして，仏教経済学という面白いことを言いだした．そして，いま私たちの経済生活のなかになくてはならないものは，高貴な精神性，豊かな霊性だ，ということを提唱したのである.

シューマッハーのテーゼは西洋近代の思想である．巨大主義と物質中心主義への全面的な挑戦である．経済成長と物質崇拝の抜き難い信仰によって，人間の社会生活が大きくゆがめられている．そこでいま，金では買えない非物質的な価値を尊重することによって，健全な人間の社会生活を回復させなくてはならない——，これこそが脱近代への視座でなくてはならない——，というわけである.

1970年代のイギリスで，この本はベストセラーになった．日本でも，いちはやく翻訳されて，手軽に日本語で読めるようになっている.

これまでの経済学は成長信仰を生みだし，無限に肥大する欲望を肯定するエセ科学に堕してしまった．しかし，だからといって人間の貪欲，巨大主義と物質主義を手放しにしておくことは許されない．そこで，これらに代わる新しい考えとして，仏教経済学，つまり中道をすすむ経済学が提唱されたのである.

仏教は「中道」の教えを説く．極端な快楽主義と極端な禁欲主義を排して，その中道をすすむ．そこで，この中道の教えに則って，とくに「正命(しょうみょう)」＝正しい生活，ということに指針が求められるわけである.

言うまでもなく，仏教者は西洋文明の物質中心主義者とは非常に異なっている．仏教者は文明の本質を欲望の増大のなかにではなく，人間性の純化のなかに見出す．物質中心主義者は，主として＜モノ＞に関心を向けるのに対して，仏教者は＜解脱＞に主たる関心を向ける．けれども，仏教は「中道」であるから，けっして物質的な福祉を敵視しはしない．＜解脱＞つまり悟りを妨げるものは，＜モノ＞つまり富ではなく，富への執着であり，渇望なのである．仏教学者の基調は，したがって「高貴なる清貧」というものなのである．

いま，豊かさとは何か，真に幸福であるとはどういうことをいうのか，しきりに問われている．「幸福である」ということは，人間が内面的な欲求をどれだけ充足し，どこまで安心立命の境地に達しているかによって決せられるものである．とすれば，近代経済学が考えるような，生産と消費を豊かにすれば自動的に生活水準が向上し，人間が幸福になれる，という考えは誤りだった，ということになる．消費は，人間が幸福を得るための手段ではあっても，目的ではない．理想は，最小限の消費で，最大限の幸福を得ることだ．仏教経済学はこれを理想としている．そこで，シューマッハーは驚嘆して，次のように書いた．

「経済学者の観点からみて，仏教者の生活がすばらしいのは，その様式がきわめて合理的なこと，つまり驚くほどわずかな手段でもって十分な満足を得ていることである．経済学者にはこれが非常に理解しにくい．＜生活水準＞をはかる場合，多く消費する人が消費の少ない人より＜豊かである＞という前提に立って，年間消費量を尺度にするのがつねだからである．これに反して，仏教経済学者にいわせれば，この方法はたいへん不合理である．そのわけは，消費は人間が幸福を得る一手段にすぎず，理想は最小限の消費で，最大限の幸福を得ることであるはずだからである」．

シューマッハーの仏教経済学は，最小限の手段によって与えられる目的をいかに達成するかについての体系的な研究であり，その研究の成果は，

人間の経済生活のなかに高貴な精神性，豊かな霊性をもちこんで，質のある経済生活を志向することに結びつくものであった．こうした生活は，みずからの暮らしのなかの思想と意志とによって積極的につくりだされる簡素な生の形態でもある．大量生産と大量消費の現代の経済システムは，たしかに考え直してよい時期にきている．ひとりひとりが必要な限りでの少量消費ですむような，そうした経済システムは成り立たないものだろうか．「欲を少なくして足るを知る」（少欲知足）の道を，これからまじめに模索していかなくてはならないだろう．

エコロジーとヒーリング

大きないのちに生かされて，私のいのちは生きている．私は生かされて生きているのだ．ああ，ありがたい．＜いのち＞について，このように自覚させるのは，いうまでもなく，宗教である．

宗教は，本当の自分との出会いを助ける．いま生きているこの自分は，本当の自分ではない．「本当の自分」は，この自分ではないものによって成り立っている自分，「我ならぬもの」によって成り立っている我なのだ，と宗教は教える．

「本当の自分」とは何だったのか，といえば，それはあの「生かされて生きているいのち」のことだったのだ．

この＜いのち＞は，神のいのちとも，仏のいのちともいわれるが，要するに，私たちはみなこの＜いのち＞によって，「生かされて生き，動き，かつ存在している」のである．

この＜いのち＞の存在の場所は，大地であり，地球であり，宇宙である．生きている大きな自然と，私たちをも含むさまざまな生命体とが相互依存的に，相互関係的に，ささえあって生きているこの場所である．ここでは，あらゆる生命体は不可分の関係にあるから，生命的な存在連鎖のゆえに，生命中心の，エコロジカルな，主体–環境の系（システム，つまり

網の目）でみる倫理が成り立つのだ．したがって，人間と人間のみならず，人間と人間でないもの，つまり人間と自然とのあいだにも，共通の存在意義が生じてくるのだ．ここに＜共生＞という考えの成立する基盤がある．さらに，人間と自然との共生を可能にする現実的な基盤は，エコロジカルな，バイオセントリックな価値観なのだ．

生命中心主義は現代の霊性，スピリチュアリティ，にほかならない．そして，このスピリチュアリティの存するところに現代人のヒーリング，癒し，がある．だから，生命中心主義のエコロジーは，「自然とのつながりを回復させてくれる癒しの思想だ」，「ヒーリングの思想だ」，とも言われるわけである．「ヒーリング」のもともとの意味は，「ひとつの全体になりきること」だったのだ．

癒されて生きている者の結びつきは，信頼の結びつきである．この信頼の結びつきのなかで，対話と協調が成立する．この「対話と協調」は，言いかえれば，「寛容と非暴力」である．そして，これこそが，いま宗教の倫理として求められているものなのだ．多元主義的な宗教状況のなかでは，それぞれの宗教が，どれも「道」である．そして，自分の真理の理解，自分の真理の実現は，あくまでもその「途上にある」という自己認識のもとでなされなくてはならない．

「道の途上にある」という自己理解をもつ宗教は，前向きに，将来へと向かう．前向きに将来を迎えるためには，他の宗教を排斥したり，抱え込んだりするという，過去の，後ろ向きの姿勢から脱却する．排他主義や包括主義を脱却した宗教多元主義が，21世紀の将来に向けて，「さて，どのような宗教の＜実＞を結ぶのだろうか」と，この私には興味が尽きない．

＜危機の宗教＞というネガティブな視点から，将来を望み見るポジティブな視点に切りかえて，現代の宗教の起死回生をはかるとすれば，私には，以上のような諸点に収束するのではないか，と考えられる．

おわりに

若干の問題点を明らかにしておきたい.

第一に，日本の宗教はもっとエコロジカルな方向を模索すべきではないのか．たとえば，神社神道は建物ではなく，＜森＞が重要であるという点で，自然宗教的なものを現在でもその奥底に持っているのであるから，「自然と人間」というテーマを追求して，現代社会の問題状況にもっとコミットすべきではないのか.「自然と人間」をテーマに，自然破壊や大気汚染，水質汚染，環境ホルモンのことなどを語り，地味で持続的な学習を氏子（うじこ）たちとなすべきではないのか.

こうしたことは何も神社神道にかぎって言われることではない．けれども，現代社会の問題状況のなかで，もしもそうしたことをしないでいるならば，宗教は怠慢のそしりをまぬがれないだろう.

エコロジカルな認識は，最も深いレベルでは，より大きな全体に属している，より大きな全体とつながっている，という認識なのだから，これはあらゆる精神的，霊性的な伝統に共通する．したがって，仏教も例外ではない．仏教もまたエコロジカルな方向に近いことは，だれもが認めるだろう.

第二に,「仏教は中道をすすむ経済学である」という視点を踏まえて，これまでの経済指標であるGNP，国民総生産に代わる，もっと新しい経済指標を模索すべきではないのか．GNPは量によって豊かさをはかる指標である．しかし，真の豊かさは，量ではなく，＜質＞による豊かさであるはずだ．だから,「豊かさ」が心にしみわってくるような豊かさの指標，そういう指標を，仏教は＜仏教経済学＞から引き出すべきだろう.

第三に，宗教を考えるうえで重要なこと，つまり，＜危機の宗教＞が起死回生をはかるとすれば，それはどこに道が開けてくるのだろうか，ということである．それは宗教の自己解放／脱制度化，あるいは，信仰の自己

解放／脱教義化，というところにあるのではないのか．制度のなかの宗教から制度の外に出ていく宗教になろうとする．あるいは，教義に縛られた信仰を教義から解放していこうとする．そういうところに，新しい道が開けてくるのではないのか．また，その道にこそ，宗教の成熟，信仰の成熟というものが見られるのではないのか．

信ずる者をひとりひとり固く制度のなかに取り込んでしまい，その内部で，霊的段階に差別をつける．さらに，霊的に低い者を抹殺しても＜善である＞という考えをまことしやかに説く．これが宗教の制度化，信仰の教義化の，閉塞的な状態なのだ．これでは宗教が現実的な問題に対応することもできなければ，信仰が成長することもできない．宗教が一見，栄えているようにみえても，あるいは信仰が一見，保持されているようにみえても，これでは本来の意味での宗教性は限りなく後退している．愛媛大学の上田紀行氏が『宗教クライシス』のなかで述べているとおりである．次に引用しよう．

「会社や学校といった組織が発展し，一見，豊かになっているように見えながら，個人個人は豊かさと存在感を喪失している．こういう日常世界と宗教世界がパラレルであることを認識して，宗教世界を真に「宗教性」の存在する場所として復権させなくてはならない」．

まったく同感である．宗教が直面している＜現実の問題状況＞や，信仰が必要としている＜信仰の自己成熟＞ということに一向に関心を示さず，これを等閑に付しているならば，それこそ宗教が，あるいは信仰が，＜危機の宗教＞，＜危機の信仰＞の状態にある，といわれることになるだろう．

参考文献

A. N. Whitehead, *Religion in the Making: Lowell Lectures, 1926.*（『宗教とその形成』斎藤繁雄訳，ホワイトヘッド著作集第7巻，松籟社，1986）．

E. F. Schumacher, *Small Is Beautiful: A Study of Economics as if People Mattered*, 1973.（『スモール イズ ビューティフル』小島慶三・酒井懋訳，講談社学術文庫，1986）.

Charles Cummings, *Eco-Spirituality: Toward a Reverent Life*, 1991.（『エコロジーと霊性』木鎌安雄訳，聖母文庫，1993）.

Sallie McFague, *The Body of God: An Ecological Theology*, SCM Press, 1993.

Leonardo Boff, *Ecology & Liberation: A New Paradigm*, Orbis Books, 1995.

森岡正博『生命観を問いなおす』ちくま新書，1994.

上田紀行『宗教クライシス』21 世紀問題群ブックス 11，岩波書店，1995.

間瀬啓允『エコロジーと宗教』現代の宗教 10，岩波書店，1996.

金井新二『現代宗教への問い』教文館，1997.

** 三つのシンポジウム（「危機の宗教」日本学術会議宗教学研究連絡委員会主催，1997 年 6 月 23 日開催；「21 世紀における人類の課題と宗教」慶應義塾仏教青年会主催，1998 年 5 月 27 日開催；「生命と環境」陽光文明研究所主催，1999 年 8 月 17 日—19 日）の発題原稿（走り書きメモ）を整理して出来たものである．各シンポジウムにおける批評，評言の幾分かが，ここには反映されていることを付記しておきたい．